

# 針葉樹会報

第 127 号  
2013 年 6 月



## 目次

■ ■ ■ ■ ■	追悼	■ ■ ■ ■ ■
中村正司君と中樹会	渋谷	一郎
追悼 中村正司兄を偲ぶ	南	昌宏
グ中樹会 乗鞍スキー雑感	海老澤	齊
中村正司さんを偲んで	高橋	
M 中さんを偲んで	高崎	尚好
中村正司先輩の遺稿	宮川	治郎
	守久	

### 未踏の岩峰、禁断の山塊

— 四川西部高地 2012 秋 —

中村

キナバル山紀行	蛭川	保
気がつけば山ばかり	藤原	
会務報告	隆夫	
三月会通信	朋之	
倉知敬さんの最近の論考について	竹中	
編集後記	彰	

表紙写真＝岡嘎山群の中央部東面のパノラマ

撮影・中村

保

31	29	23	20	18	13	9	7	6	5	4	3	2
----	----	----	----	----	----	---	---	---	---	---	---	---

発行日 2013 年 6 月 30 日

発行者 針葉樹会  
(会長 竹中彰)

印刷所 ヤマノ印刷株

針葉樹会報  
第 127 号

編集人 小島 和人  
〒241-0817  
横浜市旭区今宿 2-60-1  
会報幹事／小島和人、井草長雄  
川名真理

## 追悼——中村正司氏

### 中村正司君と中樹会

渋谷 一郎（昭28年卒）

然と坐っているのが例だったから。あの日の彼の、最近めったに見かけなかつた活潑なしぐさは今にして思うと、何かの前兆だつたのかも知れない。とにかく我々は久しぶりに目にした中村君の元氣ぶりに大満足し、次の二月の会を楽しみにして別れた。

晩年の中村君と会つたのは、ほとんど中樹会（ほぼ二ヶ月おきの）席上でだつた。去年（平成二十四年）の最終会は十一月二十日で、次回は年明け二月十五日と決まり、新年最初の会合を十四階青渕の間に予約して散会した。

ところで、この昨年最後の中樹会は、何時になく充実したものとなつた。中村君はこの年の盛夏から初秋にかけて、夫妻と娘さんの三人で南欧の温泉地に長期滞在して保養したが、その日々の詳細な記録を数点の略図とスナップ写真入りの資料にまとめて我々に配布してくれた。説明する彼の口調がまた実に楽しそうで、あの印象は未だに記憶に新しい。なぜなら、この数年来といふものは彼の難聴がひどくなり、普段の会合の席だと独りだけボツンと控えていて、一座の談笑をよそに超



中樹会のメンバー一同。  
左から、鹿俣、中村、高橋、海老澤、渋谷、南。  
2007年5月29日、江ノ島にて

その二月の中樹会でも中村君は何時もどおり機嫌よく、元気だつた。ただ違うといえ、二十年ほど中樹会のメンバーで欠かさず続けてきた乗鞍高原のスキー行が遂に取り止めとなり、ゲレンデの雪質や滑降ぶりの報告を聞けなくなつたことか——これもまた加齢という現実として受容せざるをえない問題の一つだろうか？

それにしても近頃の中樹会では、最盛期のメンバーたちが残した数々の奇行・奇談や、その日々のヤリトリを回想してはなつかしむ機会が多くなつてきた。新年初の例会はこのようにして終わり、次回の日時を約束し、同じ個室を確保して散会した。

ところで三月四日（月）は、旧制東京商大昭和二十八年（卒業生）会の六十周年記念総会が予定されており、我が中樹会の全員もこ



の会のメンバーであることから、「恐らく半月と置かずに、総会の会場に設定される如水会館で顔を合わせる機会があるだろう」とは漠然と思つたことだつた。たぶん中村君のことだから、その記念総会の世話人メンバーに入つていたに違いない。彼の気質だったら、面倒がらず引受けたことだらう。

総会当日、会場で海老澤君と南君の顔は見かけたが、開会の時刻になつても中村君の姿が現れない。この頃のことだから、交通機関に障害でもと思っていたら「中村君は体調すぐれず不参」との情報が耳に入つてきた。滅多にない事だが、いつも元気で通している彼だから大事あるまい、と軽く考えて、その場をやり過ごした。

三月八日の午後、海老澤君からの電話で中村君死去の第一報を受けた。その知らせは、まさに晴天の霹靂のように耳を打つた。通夜と告別式までの数日間、日常の仕事も手につかないままに、『針葉樹』や『針葉樹会報』の関係記事を反復して読み返しながら、小泉さんや中村君に代表される山岳部の学生リーダーが、大戦後の食糧難や登山装備の不足の中で、部の運営に苦心慘憺した事跡を思つた。

……中村君と私は昭和二十二年の四月、商大予科一年五組で知り合い、共に国立の山岳

部山小舎での新人部員歓迎会で同席した。予科三年、学部三年の六年間、夏冬の合宿や個人山行に同行し、悲喜こもごも思い出は今もつきない。

二十八年三月の卒業とともに、中村君は実社会、私は学究の道へと別れ、それぞれ忙しない日常生活を送りながら、世は昭和から平成へ移り、世紀の変り目を体験した。

我々が引退する六十歳代末から八十歳に至る十数年、経済社会の変転はかつて見なかつた様相を呈し、様々な厳しい現実に直面する。

中村君が定年後に一念発起して、西洋画の制作に専門的に没頭し、またシャンソンの歌唱に打ち込んだのも、今にして思えば、彼の限りない人生追求型の積極性・包容性・樂天性を示すものだつた。

中村君が定年後に一念発起して、西洋画の制作に専門的に没頭し、またシャンソンの歌唱に打ち込んだのも、今にして思えば、彼の限りない人生追求型の積極性・包容性・樂天性を示すものだつた。

### 追悼 中村正司兄を偲ぶ

南 昌宏（昭28年卒）

今年（平成25年）三月四日、東京商科大学の昭和二十八年会（旧制）六十周年記念総会



安達太良山薬師岳にて。 左から、海老澤、南、中村。  
2008年5月21日

が如水会館でおこなわれ、五十余名が出席した。同期会など常連の中村君も当然参加するものと決め込んでいたところ、当日同級生幹事から風邪による発熱で急に出られなくなつたと聞いた。そのひと月前の中樹会で昼食をともにしたときは、いつもと変わらず元気だつたので、珍しいこともあるものと、まったく気にしなかつた。

そして、その僅か三日後の三月七日に急逝したことを、翌八日に知らされた。まつたく信じられない事態にぼう然とするほかなかつた。私たち同期生の仲間のなかでは、もつとも元気だと思いこんでいた。いまは、生者必滅会者定離の無情がただただ悲しい。

昭和二十二年四月、旧制大学予科に入学した私は、当初半年ほど国立の寮で生活し、同室の先輩にくどかれて硬式野球部に入部。シーズン（一年生の秋と二年の春）活動したが、右脇の下の古傷が炎症を起こし、硬球の野球は続けられなくなつて退部した。

この野球部活動の挫折で落ちこんでいた私を、同級の中村君が、その年の夏、奥日光から鬼怒沼への山旅に誘ってくれた。奥鬼怒の林道を歩きに歩いてやつと着き、鬼怒沼山（標高二一四一メートル）の山頂近くにある高層湿原の別天地の自然美に全身で感動を味わつた。つ

いで、その冬の山岳部の八方尾根スキー合宿への参加を勧められた。そして、この合宿ではじめて山岳部活動を体験し、入部を決め、昭和二十五年夏の北岳合宿から私の部員活動がスタートとする。

戦争がはじまつた小学六年生の頃は野球遊びに熱中していた東京っ子の私は、旧制中学三年の十五歳のとき雪国に疎開。そこで勤労運動のため一年近く学業から離れ、工場建設工事の現場で、ときにはきつい肉体労働をやらされた。四年生の夏に終戦で復学。最終五年生のとき、疎開者中心で野球部を創設した。わずか六、七ヶ月の短い、貧弱な部活動であったが、敗戦の閉塞感と終戦の開放感のはざまで揺れる少年にとつて、スポーツ遊びの爽快感は再生へのたしかな活力となつた。

予科生になつて山岳部に移つたが、このとつびな転向を、三年間の雪国での耐乏生活や肉体労働という体験が後押ししてくれたようだ。雪のなかの行動であれば、東京育ちの仲間たちにひけをとることはない、そんな気がしたものだ。

よくよく考えてみると山岳部に中途入部したのは中村君の勧めのおかげというだけではない。まったく登山歴のない私が部活動を続けられたのは、彼が私にとつて同期というよ

り上級生部員のような存在だったからではないだろうか。これからは中村兄と呼ぶことにしよう。

中村兄よ、励ましを長い間ありがとう。

## 中樹会 乗鞍スキー雑感

海老澤 齊（昭28年卒）

中樹会スキーは、20回続いたが、節目と考え元気が残る間に終止符を打つこととした。

今回突然の中村兄の急逝には愕然とした。二月の会合には元気な姿を見せ、何事もない様子であつたが、三月の卒業六十周年大会当日、突然の欠席、追うように三月八日奥様から突然の訃報、唯々驚き、ここに心から哀悼の意を申し上げる。

中樹会でスキーをすることになったのは、92年に小泉先輩の熱心な誘いからであった。計画は、再開された乗鞍高原、木立山荘へ泊まり、スキーで白銀の世界を満喫するもの

か分からぬのが現実であった。

乗鞍の玄関口である松本電鉄の新島々駅も馴れ親しんだ田舎風の駅舎からモダンな現代風駅舎に様変わりした。またバスの待ち時間も減り便利になつた反面忙しい接続となつた。宿も山荘の老夫婦の引退による閉鎖で11回目以降は唐松荘に移つた。しかし木立山荘の紹介もあり、快適に過ごせたことは感謝する。

乗鞍はゲレンデも多様で、技量に応じて滑ることが可能である。我々は主として三本滝レストハウス前からの大斜面を満喫した。

しかし年により長距離リフトの修理と重なり、休暇村コースを主として利用した年もあつたが、どこを滑っても充分堪能出来た。またスキーには怪我の危険もあつたが、安全第一を心掛け、無理をしない転ばないコースを滑ることを考えたので、お陰で参加者全員が無事に終わることが出来たことは評価できる。スキーは若者のスポーツと考えていた。今は逆に何歳になつても可能なスポーツと云えるのではないか。

故中村兄はスキーのみならず山全般に話題豊富であり、ひと倍楽しんでいたと推察する。晩年は耳が遠く、苦労もあつたとおもうが、淡淡とし、食事なども残らず平らげる健啖振りを發揮し、温泉入浴中やリフト乗車時



南アルプス北沢峠にて。  
左から、海老澤、渋谷、中村、南。 2007年9月3日

などは自慢の喉を聞かせる愉快な一面もある良き仲間であった。ここに冥福を祈る。

中樹会もメンバーの多くが鬼籍に召され、全員で四名まで減つたのは寂しいことであるが、互いに健康に留意し、暫時頑張ることを願う。

### 中村正司さんを偲んで

中樹会 高橋 尚好（昭28年卒）

昭和二十一年四月、まだ瓦礫にまみれる新宿の片隅、都立六中の掲示板、「山岳部創設、來たれ！」のポスターにひかれ、我々四年生十名ほどが入部した。

第一回目の「登山」は箱根の山だつた。

小涌谷駅から闇の中を一時間歩いて、屋根と柱だけの名ばかりの小屋で六、七人、焚き火を囲んで「神はあるか、いないか」と徹夜で議論した。

翌日、霧の中、駒ヶ岳・神山に登り、真赫な夕日を眺めながら帰つた。あとは専ら丹沢「わらじ会」の命名はそれに由来する。バス

ターを描いたのは、五年生の中村さんであつた。

翌々年、中村さんに続いて、一橋山岳部に入れて貰つた。夏の涸沢、冬の藏王、八方、乗鞍の合宿。

ザイル、ピッケルは磨り減り、いつ切れるか、折れるかわからない。スキーのビンディングは固く締まらず深雪で外れて、往生の極み。そんな時代だつた。

それでも私は求道者の如く、黙々と空き腹を抱えて山道を踏みしめた。私はいつも中村さんの背を見ていた。

骨折のため私の山岳部での生活は程なく終わつてしまつたが、中樹会での再会で中村さんとのお付き合いが復活した。

中村さんは、山と自然を愛し、シャンソンと巴里を愛し、キャンバスにそれらを書き込んでいた。

中村さんは、まことに、ひたすら人生を慈しんだ人だつた。中村さんの、その姿眺めるだけで心がなごんだ。

はじめて中村さんと接してから、七十年になんなんとする時が流れた。いまはもう、あの中村さんは居ない。

永い間、中村さん、本当に有難うございました。さようなら。

## M中さんを偲んで

高崎 治郎（昭31年卒）

「ウマイナ」と感極まつた声。暫くして「この水は奥多摩の山奥から、今朝汲んで来た水だ」と、飯盒の中の水をもう一口旨そうに飲んだ。

昭和27年（1952）4月の小平講堂の壇上の中村正司さんは、大自然の中で、又、テントの中で友と語らい、人間を育むことが大切だと話して降壇した。

それまで各文化部、運動部のオリエンテーションで、長々と宣伝する話にも飽きていた私は、この山岳部だと決めた。後で、中村さんに「あの水は誰かが汲みに行つたのか？」と尋ねたら、「水道の水だよ」と言われた。我々約20名の新入生がまんまと騙されて入つたことになつた。

M中さんが、チーフリーダーとしての最後の夏合宿（涸沢・穂高・北アルプス縦走）に新入部員11名が参加、総勢20名以上を超えた。甘利や佐藤等を除けば、大部分が山は素人だつたが、11名が残り、オーシャン会と名乗つて、今、傘寿を迎えて、山歩きや五街道を歩いたりしているのは、中村さんのお蔭だと思っている。



南アルプス北沢峠長衛荘にて。  
左から、海老澤、南、渋谷、中村。 2007年9月4日

山岳部には中村姓が多く、M中さんと呼んでいた。S中さん（賛治、昭23卒）、同期のY中（幸正）、T中（保）と傑物揃いだつた。M中さんは、定年後は、油絵を描かれ、展覧会の案内状を頂くと、よく観に行つた。登山用具を描いた大作があつたので、部室新築記念で、S中さん（賛治、昭23卒）によると、M中さんは、定年後は、油絵を描かれ、展覧会の案内状を頂くと、よく観に行つた。登山用具を描いた大作があつたので、部室新築記

念に飾らせて頂きたいとお願いしたら、返却するとの条件であつたが、その後、寄贈して頂くことになった（上原君が搬入等に尽力した）。

Y 中の遺骨を（ほんの少しだけ）乗鞍岳に散骨することを甘利が提案して、オーション会、中樹会の仲間と一緒に行ったことがあるが、「休憩」の声がかかると、すぐスケッチブックを開き、あつという間に描かれるのには、感心してしまった。

銀座で個展が催された時、オーション会員数名で参観に行つた事がある。大変よろこばれて、得意のロシア民謡やシャンソンを数曲歌われた。また、夫人との共催の時、「奥さんの書道の方が、いちだんと上手だ」と言つたら、「そうかい」と笑つておられた。

突然の訃報に驚いたが、お通夜には丁度、オーション会で登山の計画があつたので、出席出来ず、告別式に佐薙、松尾と三名で参列した。中樹会の三名と一緒に山讃賦を歌い、お礼の思いを込めてお見送りした。

## 中村正司先輩の遺稿

宮川 守久（昭33年卒）

前略 先週金曜日、中村正司先輩（通称M中さん）のお通夜に参列致しました。針葉樹会関係では、同期部員の南さん他中樹会の方が3人ばかり来られ、あとは32年各務謙蔵さん、33年上原利夫君と一緒になりました。故

横山院一先輩、中村正司先輩、各務謙蔵先輩と小生は一橋山岳部のみならず、勤務先東京海上保険（株）においても先輩後輩の関係にあり、入社以来色々と大変ご指導・ご厚誼を賜っております。

『以下は「みづたま会報大35号」からの転載です』

## 7回目の巳年に南欧の旅

東京 中村 正司

いつの間にか7回目の巳年にあたる84歳を迎えた折、家族から若返りの為にと海外旅行の話が持ち出された。難聴ぎみに悩んでいる私にとっても今しかないと思われ、8月と9月の2ヶ月に及ぶ「南欧の旅」計画の思い

要性』を滔々と一席ぶたれたことは全社的に有名な話です。

なお近着の東京海上O.B会報2013年3月1日号に、干支（巳年）特集1929年生まれの一人として「7回目の巳年に南欧の旅」の一文を寄稿され、昨年8月～9月に元気にイタリヤ・オーストリアを家族と旅行された様子が述べられているのを拝見した直後の訃報に驚いた次第です。お通夜の席上で先輩や上原利夫君のおすすめで、針葉樹会報に転載して貰つてはどうかということになつた次第です。ご遺族には転載のご了解を得ていま

す。

草々

が強まり、日ごろ健康相談に当たつてくれておられる医師の勧めもあって実施の運びとなつた。

その概要の骨格はオーストリーオーの奥地にある山岳地帯での1ヶ月に及ぶ「洞窟治療」である。麓の施設で診断と指導を受けたあと、トロッコに乗つて洞窟の奥地に入つて行き、熱い蒸気に満ちた暗い穴ぐらの中に男女別々に設置されたベッドで裸になつて横たわり、大汗を流しながら一時間程新陳代謝を続ける。これを2～3日置きに続ける仕組みである。

驚いたことに其処には世界中から訪れており、英語が唯一共通語で会話されていた。お蔭で耳鼻ノドそして眼など快適な状態が続き期待もした次第。ところでこの治療は数日置きに行われ、人々はそれに合わせて観光計画を立てており、日本からも各地から沢山訪れていたが、東京からは私達だけで世間の広さに驚いたりもした。

#### 〈入浴治療に併せての南欧旅行〉

上記治療に入る前、盛夏のローマに着陸して直ちに近海の小島に渡り宿をとつて1週間程海水浴を楽しんだが、異国情緒に胸躍る中スケッチを楽しみ異国の夏祭の夕に心を奪われた。やがて夏も幾分峠を過ぎた頃、前述の大好きな室で、ローマ市内へは歩いて2時間、

洞窟治療の為オーストリーオーのバドガシャタインという町に入つた訳だが、そこでも町祭りが続いており、テント張の野外大サーカス団による肝をつぶすような興奮に巻き込まれたりする中、やがて秋風を感じる9月中旬から、ミラノ3泊、ベネチュア5泊の旅に向かつた。

しかし旅は何時も甘いものではなかつた。途中列車の路線事故のため駅で長時間待機させられ、遂には終着駅であるベネチュアに向けて全員歩き始めたのである。我々も女房・娘3人共大きなトランクを転がし乍ら、歩き

続けた折、同様歩行中の男性が我々を見かねて一部背負つてくれ、その日の宿ベネチュアのホテルまで遠路運んでくれた。感謝の気持ちを包んで渡そうとしたが微笑みの中固辞して去つて行つた紳士の後姿を見えなくなる迄見送つたが、その後姿が今以て忘れられない。お蔭でその後昼夜5日間に亘るベネチュアを楽しむことが出来た。

そしてその後我々は電車、バスを乗りつぎ古い田舎町や数多くの湖畔を渡り、スイスを一部横切つて出発地であったローマの郊外の宿へと長旅を続けた。この宿はこれから2週間に亘つてローマ市内を見学する拠点として予約したもので、郊外ビル五階建三室台所付の大きな室で、ローマ市内へは歩いて2時間、

3通りのルートを楽しめる拠点であった。第1のルートは芝と樹林の公園を横切る道、第2は50米巾の芝や樹に満ちた大通りを歩いて街に向かい、バスに乗り替えて都心に入るルート。第3は地下鉄で直行する方法。その時点での天候や体調次第で選んで往復を楽しもうということになった。ローマの泉や石畳の道など何度も訪れた昔をしのびながら、賑わう古き都を散策し、去り難い思いで南欧の旅を終え帰国に向かつた次第である。

#### 〈帰国してから〉

さて往路では時差など感ぜず、旅にうまく溶け込んだが、帰国時は往路と同じコースと時間であつたにも拘らず、2ヶ月程夜の不眠に襲われ、甚だしく苦労したが、老化の進行は早まつているようと思われ、決断させた周囲にそれとなく感謝している今日この頃である。

将来のアルパイン・パラダイス 沙魯里山・岡嘎山群  
チベット族の聖山 工卡拉山・カ洼洛日山塊

今年、2012年は前年にも増してチベットの政治状況は不安定でテンションが高かつた。私のフィールドである東チベットは、外国人はオフリミットのため、「最後の辺境」易貢藏布の踏査継続は断念せざるを得なかつた。代案として考えたのが、四川西部高地の長大な沙魯里山（Shaluli Shan）山系の北端に位置する岡嘎（Gangga）山群と揚子江の一大支流・雅龍江（Yalong Jiang）を挟んで東側、大雪山山系の北西に延びる工卡拉山（Gonkala Shan）山系のカ洼洛日（Kawarori）山塊の調査と山座同定である。

雅龍江と甘孜の町から南側に指呼の内に望める岩峰群を擁する岡嘎は2005年に長野県の隊が試登を行つた。しかし、主峰の特定すらできず有用な情報を持ち帰れなかつた。カ洼洛日は後述の通り禁断の聖山である。両山塊とも全て未踏峰である。

四川の後、雲南の南部を旅し、19世紀後半のフランスのメコン川探検隊の足跡を辿つたが、本稿での報告の対象外である。

2012年は岡嘎とカ洼洛日でも外国人の入域には制限があつた。春から頻発したチベット仏教僧侶の焼身自殺事件の影響である。焼身自殺が多発したのは四川省阿霸州と我々が目指す山域のある甘孜藏族自治州の甘孜県とその周辺である。この地域は四川省では阿霸州とともに大きい立派なチベット僧院が多く、政府に反抗的なチベット族カンバの土地である。

四川省はすでに外国人に開放されており、東チベットの未開放地域と違つて甘孜藏族自治州も、表向きは外国人が旅遊局、公安局や人民解放軍の許可を必要とする場所ではない。

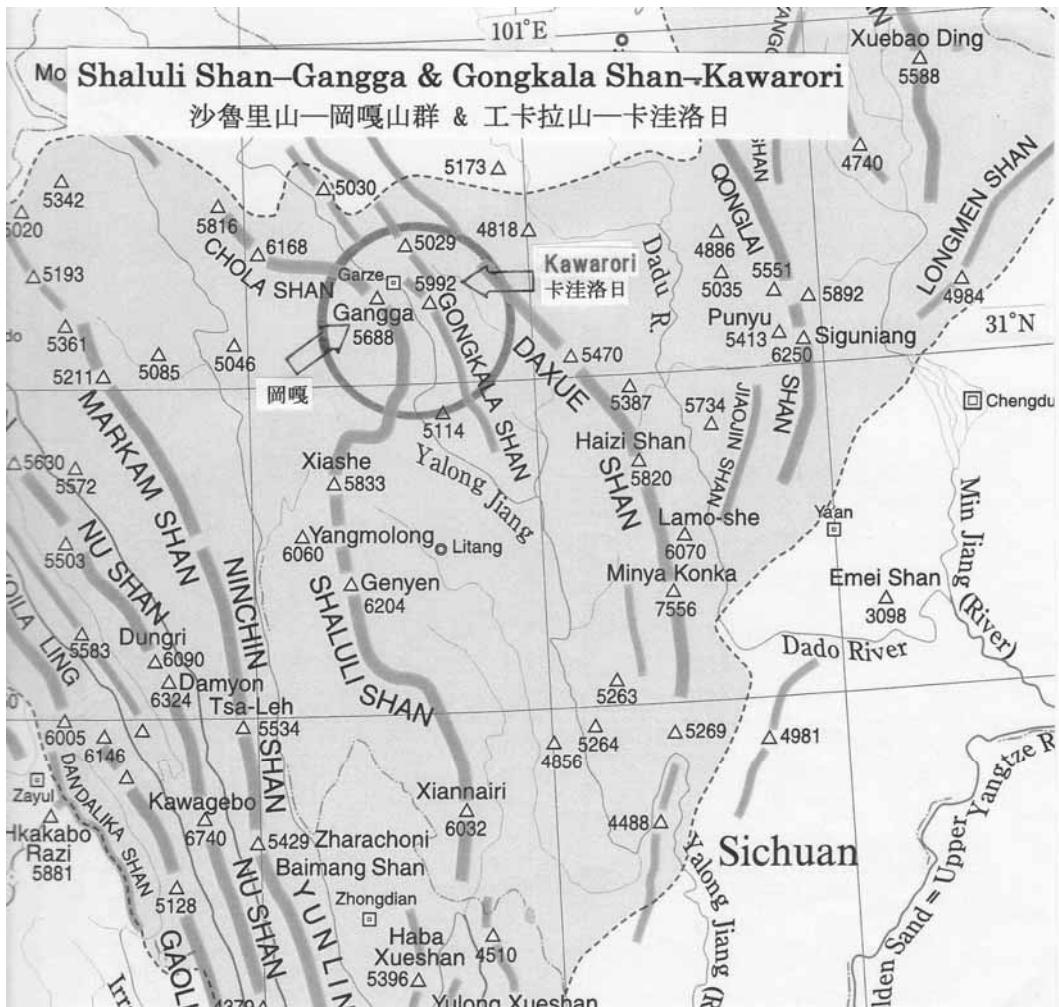
しかし、焼身自殺発生後、当局は警戒を強め、春以降神経質になり外国人旅行の制限を始めていた。折しも、尖閣諸島問題の反日暴動の直後もあり躊躇したが、公に禁止令が出ていた訳ではないので、四川大地探検公司の判断で9月下旬から10月上旬までの2週間の踏査を実行することになった。焼身自殺し



岡嘎山群中央部東面：岡嘎I峰グループ  
(左から) 主峰 5688m、中央峰 5670m、北峰 5650m (撮影・城隆嗣)

や騒擾事件の発生直後でなければ問題は無かるとの見通しに基づいた。

実際、旅行中に公安局の検閲は無かつた。が、日本への携帯電話は通じなかつた。外国人旅行者を見かけたのは甘孜の町で西欧人カップル一組だけだつた。日本人旅行者には会わなかつた。何時何が起ころか分からぬのが中国である。尖閣問題の直後だつたことが、いつも以上に心して慎重に行動し



ヒマラヤの東、チベットアルプスは登山の視点からは「世界で最後の辺境」である。添付の地図「270 Unclimbed 6000m Peaks in Alps of Tibet 2012」に示したように、念青唐古拉山東部、崗日嘎布、ゴルジュの国には260座もの6000m峰が手付かずで残されている。

一方、同じチベット族が住む四川西部高地に残された未踏の6000m峰は10座前後と少ない。しかし、5000m峰に目を向ければ未踏峰の宝庫である。聖山故に登山許可が得られない秀麗な貢嘎雪山三山は別にすれば、四姑娘山のチヨライ山系の岩峰群は登りづくられた感じだが、理塘高原南縁のケニ峰山塊の岩峰登攀は緒についたばかりである。まだまだ開拓の余地が残されている。今回の山座同定を調査した岡嘎と卡洼洛日はこれら注目すべき山塊である。

いのちの横断研老年探検隊3人、永井剛（80歳）、中村保（77歳）、新谷忠男（68歳）は9月28日に成都を出発した。準備は全て四川大地探検が整え、今回は社長の張繼躍（46歳）が隊員兼運転手としてメンバーに加わった。

成都から康定までのコースは変わっていなかった。二郎山トンネル経由ではなく、新たに開通している成都—西昌高速道路を石棉まで行き、そこから大渡河沿いに北上する。中国の高速道路建設のペースは驚くほど速い。瀘定

を通らず、ミニヤ・コンカ東面の基地の町、磨石から3948mの雪門峠を越えて温泉のある老榆林に下り甘孜藏族自治州の州都・康定の新市街（海拔2700m）に着く。

この峠の北にラモ・シェ山塊が連なる。

驚いたことに人民解放軍の大きな基地が建設中である。チベットを睨んでの軍

隊の配置であり、兵士の高所順化のためとの噂を聞いた。翌日、勝手知ったる川藏公路（北路）を迎って甘孜の町（3450m）に着いた。道路工事で手間取つたのは通例のことである。

帰路、丹巴に立ち寄り四姑娘山の写真家大川健三さんにお会いしたとき、今年は異常気象だと聞かされ納得した。雨期明けは10月上旬にずれ込んでいるという話であった。事実、我々の2週間の行程のうち好天は僅か一日半で、それも完全な「ブルースカイ」ではなかつた。それでも運が良かったのだろう、甘孜滞在



四姑娘山山塊の神山（婆謬山）5413m南面 巴朗山峠付近より望む

中の3日間に岡嘎山群と卡洼洛日の山座同定に最小限必要な写真を撮ることはできた。

私がこの二つの山群を初めて望見したのは

香港駐在中の1992年の6月であった。張繼躍も一緒だった。その後2000年10月に

も青海省に向かう旅でも山群を目の当たりに

した。6000mに手が届く大きな山塊の卡洼洛日もさることながら、岡嘎山塊の峨々たる岩峰群は迫力があり、その印象は脳裏から離れなかつた。いずれクライマーの目に留まらずにはおかないだろうと思つた。その想いが今回の調査の動機の一つだつた。「将来のアルパイン・パラダイス」という表現に相応しい山々である。川藏公路の拉子卡峠と甘孜の町付近から望まれる連山の山容はクライマーの登攀意欲を搔き立てるだろう。なかでも山群中央部の二つの山塊が挑戦的である。クライマー・パラダイスとして近い将来脚光を浴びるに値することは写真をご覧になればご納得頂けるだろう。

9月30日、晴後曇り。岡嘎山群東面のパノラマと卡洼洛日の北面の写真を撮るために川藏公路を引き返して4000mの峠、広々とした草地の拉子卡に行く。天気は晴れ間があるものの不安定だった。翌日は早朝は快晴だったので、甘孜のホテルの屋上から岡嘎主峰に

る」ことができた。ピークの同定は地図と写真を「覧頂きたい。



色達県喇榮五明寺仏教学院

卡洼洛日山塊を初めてリポートしたのは英國の探検家であり領事を勤めたエリック・タイクマンである。1918年、タイクマンは抗争が続くチベットと中國の間の和解調停のため東チベットを広く旅した。その時、拉子卡付近から卡洼洛日を望み感動している。著書『東チベットへ—英國領事の旅』(Travels of a Consular Officer in Eastern Tibet Erich Teichman, Cambridge 1922) から引用する。

「△ヨロ（現在の朱倭郷付近）から道は登りにかかる。ついで沢山のガゼルを見た。丘陵の長い登りの後少し下るとセ曲と雅龍江の標高僅か13,000フィートの分水嶺に着いた。そこから少し上ると、雅龍江を挟んで壯麗で膨大な雪と岩の峰を最高峰とする山嶺が姿を現した。ニヤロンの聖山、雪を纏つた万年雪の峰、カワロリである。東チベットの高峰の一つである。この巨大な山脈を雅龍江が貫通している。」の白峰はセ曲の谷からも一瞥される。」

（＊川の名）

タイクマンの観察は正確である。彼が辿った道は現在の川藏公路（北路）に沿っている。工卡拉山・卡洼洛日山塊は甘孜の町の南南東30 kmの所に位置する。I峰5992m、II

峰5528mとも未踏である。この山塊を登山目的で最初に偵察に入ったのは1999年秋の山梨県岳連隊である。さしたる成果はなかった。2005年秋には英國隊が登頂を目指して北面からアクセスし4800mの地点に第二キャンプを設営した。しかし、麓のラマ寺の敵意に溢れた僧侶に阻止されて登山を中途で断念せざるを得なかつた。卡洼洛日は神聖な山で、それを穢せ（登れ）ば、村に大きな災難が降りかかるという理由であつた。2007年には再び英國隊が訪れたが、この時は登山許可がおりなかつた。

2011年秋、東北大學山岳会は登山許可取得可能な見通しのもとに、卡洼洛日登山を計画した。實際、四川登山協会の登山許可是事前に取れ、登山隊は成都に入つたが、驚くべき展開が待つていた。甘孜藏族自治州体育局の幹部が東北大の登山計画を却下した。理由はこの山がチベット族の聖山だからといふ事だつた。英國隊のケースと同じである。2012年に入ると、僧侶の焼身自殺事件が頻発し、状況はますます不安定でセンシティブになつたのは前述のとおりである。

「聖山」故に地元のチベット族が登山隊を受け入れないことは多々ある。しかし、地元の村人の反対が単に「聖山」だからなのだろうか、ケースバイケースだが、疑問に思うこともあ

る。いずれ改めて書いてみたい。

僅かな期間の踏査だった。岡嘎、卡洼洛日を調査してから、予定では丹巴の北の大雪山系の未踏峰の偵察を目論んでいたが、中村がひどい風邪を引いたため諦めた。後は石塔で有名な丹巴の中路村に3泊し、四姑娘山の日隆、巴朗山峠を経て10月8日に成都有着した。峠から「神山（Pomiu or Celestial Peak）」5413mの圧倒的な南面のプロファイルを写真に収めた。

丹巴の800年の歴史があるユニークな石塔はユネスコの世界文化遺産に申請されており、観光スポットとして脚光を浴び始めている。大渡河流域の丹巴は美人谷としても有名である。また、色達県、海拔3700mのところに建つ禁断の色達県喇榮五明寺仏教学院も訪れたかったが、その機会は得られなかつた。1997年に四川省宗教管理事務局から設立に関する正式の認可をえた中国最大の官製チベット仏教学院である。たまたま、時を同じくして友人が学院に近づき、壮大な学院の価値ある写真を撮ってきた。石塔と丹巴の風情節、色達の壮大な仏教学院の写真を併せて掲載する。

## キナバル山紀行

蛭川 隆夫（昭39年卒）

「キナバル、行きませんか」と山田さんから電話。

その瞬間は、返答につまり、夕日岳（札幌郊外、五九四メートル）で発症した左膝の激痛をくどくど持ち出した。「なーに、ゆっくり、ゆっくり登れば大丈夫じゃないですか。登山道は整備されているようですよ」。山田さん持ち前の樂観的で明るい言い方に、思わず「Yes」と返事していた。山田さんは、私も所属している静内山岳会のベテラン。その山田さんにお世話をなった二〇一二年七月のトムラウシ隊のメンバーなどにも声をかけて、佐羅さんと小島さんの参加も決まった。総勢四名の平均年齢は七二歳。

思いきって整形外科でヒアルロンサンを五回注射してもらつた。高山病対策のダイアモックスも購入した（現地では登山前日とその翌日の夕方に服用）。

一一一 三年一月一八日 羽田と新千歳から

それぞれ閑空に集合し、ボルネオ島の東マレーシア・サバ州にあるコタキナバル国際空港へと直行使で飛んだ。

空港ビルを出たら、どつと熱気に包まれた（手持ちの温度計で三〇度）。かつて宮仕えの身で産業機械の売り込みのため東南アジアに通いつめたが、そのときと同じ、あの独特の匂いのする熱氣だ。懐かしさがこみ上げてきた。

現地旅行会社のガイドの王さんの出迎えを受け、ワンボックス車（専属の運転手付き）に乗つた。王さんは、旅行のガイダンスから、ホテルのチェックインや両替まで日本語で面倒を見ててくれた。山田さんは、長旅の疲れも見せずさっそくジョギングに出かけた。その時に見つけてくれた海鮮屋台村で夕食。小ぶりながらアワビも注文して一同満足した。

二月一九日 七時一五分に迎えのワンボックス車に乗り込んだ。車は、最初は南シナ海に面した海拔ゼロメートル地帯を走り、徐々に高度を上げて熱帯多雨林、さらに山地林に入つた。最後はサバ州の背骨であるクロッカーハンマの山腹をぐんぐん登つた。天候は曇り。走行中、キナバル山は雲に隠れてほとんど見えていた。

八時五〇分に、クロッカーハンマ山脈の北端に位

置するキナバル国立公園の管理事務所、P H

Q (Park Headquarters) に到着。標高は一五六〇メートル。例えると、糸魚川の海岸から走りはじめ、距離的には信濃大町を過ぎて松本の近くまで、高度的には上高地の先の横尾山荘あたりまで、来たことになる。この公園は、東京都二三区を上回る面積を有し、世界自然遺産に登録されている。

事務所の前は国際色豊かなトレッカーで賑わっていた。ここで王さんから山岳ガイドのベンションさんとボーターが紹介された。ガイドを雇うことは、トレッカーの義務となつている(ボーターは任意)。ベンションさんの手引きで入山手続き。キナバル山の登山は、定員制かつ有料制で、厳重に管理されている。そのためか、手続きにバスポートの提示まで求められた。また、個々人にネック・ストラップ付きのIDパスが渡され、登山中いつでも提示できるよう指示された。

海外のトレッキングとしてはニュージーランドとキリマンジャロしか経験していないが、どちらもこと似たようなシステムだった。富士山や大雪山系の惨状を例としてあげるまでもなく、近年日本の山はオーバー・ユースが問題となっている。これで登山先進国と言えるのだろうか。おかげさだが日本国民として「恥ずかしい」と思つた。登山の諸団体は

自ら対策に乗り出してほしいものだ。

ちょっと脱線したが、P H Q から公園の専用車に乗り換えて登山口ゲートまで移動した。標高は一八七〇メートル。先の例えを続けると、横尾山荘から本谷橋の少し上までも車を使い、それから歩きはじめることになる。

九時四〇分、ゲートで例のIDバスを見せてチェックを受け、山田さんをトップにシダやコケの生い茂る雲霧林の中を歩きはじめた。最後尾は、ベンションさんとボーター。ボーターは普通はどんどん先に行つてしまふのだが、我々のボーターは最後のピッチを除いてほぼ一緒に行動した。実は、彼はベンションさんの息子なのだ。

歩きだしてほどなく雨粒が落ちてきた。ワン・ピツチで Pondok Kandis に到着 (pondok は現地語でシェルター)。ベンチの付いた四阿の周りに水洗トイレや非常用の貯水タンクがある。こういうシェルターが、今晚泊まる小屋でほぼ標高差二三〇メートルごとに全部で六ヵ所あり、いずれも休憩場所として好適だ。

山田さんは、ゆっくりした歩調で我々を先導し、ときには立ち止まって呼吸を整えさせてくれた。後続のパーティに次々と抜かれたが、おかげで膝痛の方はちょっととした違和感を覚える程度ですんだ。

二七〇〇メートルあたりから谷川岳や至仏山と同

じ蛇紋岩帯(超塩基性岩林)に入り、植生がすっかり貧弱になつた。晴れていれば眼前に屹立する花崗岩の大岩壁を仰ぎ見ることができるはずだが、あいにくガスが立ちこめている。登山道は風雨をまともに受けるようになり、消耗した。

一六時五〇分、すっかり濡れてラバン・ラタ小屋に着いた。ここは標高が三三二七二メートルで、先の例えを再度使うと、本谷橋から奥穂高岳の頂上まで登つたことになる。例のIDバスを見せてチェックイン。三階建てで一階はロビーと食堂。あてがわれた二階の部屋に入り、登山靴から備え付けのシリップに履きかえ、濡れた衣服を脱ぎ、汗だくの下着を着替えて、ほつとした。部屋には壁の両側に二段ベッド。シーツはきれいだし、暖房もある。トイレは共用だが、東南アジア式(?) ウオッシュレットだ。風邪引きが心配で使わなかつたが、温水シャワーもある。

一息ついて、食堂へ下りた。ビュッフェ方式で、ステップ・サラダ・飲物・フルーツ・デザートはもとより、メインも種類豊富だ。町の六倍という値段だが、ビールもある。佐羅さんは寝酒と称して飲まれたが、残りの三人は明日に備えて自重した。

二月二〇日 二時起床。星空だ。「おつ。」

れはいいぞ！」と小島さんの歓声。気温三度。ヒートテックの下着に冬山の衣服。雨具を含めて五枚着込んだ。

三時二〇分、ヘッドランプを装着して出発。すでに多くのパーティーが先行しており、見上げる大岩壁を光の列が上に向かって動いている。出だしはガリー状の樹林帯だが、三五〇〇㍍の森林限界を過ぎると花崗岩の斜面となり、ファックス・ロープが始まる。驚くことに、すでに頂上を往復したパーティーどこですれちがつた。

単独行の美女（中国系マレーシア人）と抜きつ、抜かれつとなるが、他には後続者はいない。ある休憩場所で彼女がしきりに頭痛を訴えたので、山田さんがダイアモックスを分けてあげて感謝された。エベレストBCサイトを往復したことがあり、そのうち富士山にも行きたいと言っていた。

一時間ほどで傾斜がゆるみトラバースとなる。四時五〇分、サヤ・サヤ小屋に到着。またもやIDバスの提示が求められた。

ここからは、緩傾斜の台地、花崗岩の岩盤となる。同じ花崗岩の山でも、甲斐駒ヶ岳、燕岳・金峰山などは風化が進み白い砂礫と化しているが、こちらは硬い一枚岩。フリクションを利かしての登高である。

三八〇〇㍍の標識を過ぎてふと振り返る



キナバル山頂にて。

左から 小島、山田、佐薙、蛭川（2013年2月20日）

上直下の急傾斜では、息が苦しかった。ときどき立ちどまつては呼吸を整えつつ歩き、八時四〇分、ついに頂上（Low's Peak 四〇九五㍍）。さすがに嬉しかった。かすかに雲が湧いてきていて、はるかに見下ろす南シナ海はガイドブックの記述「エメラルド色」にはほど遠かった。頂上は狭いので岩盤まで下りてからくつろごうと衆議一決。先行していたマレーシア人の美女を追うように、九時二〇分に下り始めた。雨具は脱ぎ、膝痛に備えてサポーターを巻いた。

巨大な岩盤の末端近くまで下りて、暖かい日差しを浴びながらのんびりした。ベンショーンさんとおしゃべりもした。彼は、山麓のカダサン・ドウスン族（数十のエスニック・グループの総称）の四二歳で三児の父親。カダサン・ドウスン族は、その多くが今やカトリック教徒ながらも、昔からの精霊信仰を受け継いでいる。ちなみに「キナバル」の由来は、諸説あるが、*Eii*宿つている/*nabalu*=精霊、または*Kii*=存在している/*nabaluu*=死者の靈。公園のガイドたちは、毎年集まり、供物や生け贋をささげて山の精霊と祖先の靈を鎮めている。前方のスカイラインにもピーキングいくつか見えるがそれらは頂上ではない。最高点は向こう側に隠れている。山田さんが「日本はない山容だよね」と感嘆した。

最高点が見えてからが、けつこう長い。頂上

やがて夜がすっかりあけてみると、花崗岩の広大な岩盤が遠くへと延び、その左右に同じく花崗岩の特異な形状のピーグが並んでいる。前方のスカイラインにもピーキングいくつか見えるがそれらは頂上ではない。最高点は向こう側に隠れている。山田さんが「日本はない山容だよね」と感嘆した。

目の前のベンショーンさんは、トレッキング・シューズを買う余裕がないのかスリップポンを

履いているが、しっかりとケイタイを所持している。PHQや小屋との連絡、また仲間同士の情報交換などに、携帯電話はガイドにとって欠かせない道具である。

すっかりくつろいで下山を再開。岩盤が終まつた。左足になるべく荷重をかけないよう、慎重に足を運んだ。樹林帯に入つてから、雲が多くなり小雨がぱらついてきた。我々が最後のはずが、ここで登つてくる。パーティーとすれちがつた。なんと今朝早く登山口を出てここまで登つてきたのだという。

一二時四〇分、小屋に落ちついて上を見あげると、登山道の左側の垂直に近い岩壁に数名のパーティー。固定されたワイヤーを頼りにトラバースしている。あとで知つたが、ワイヤー・レール・鉄杭・梯子を伝つて岩壁を歩くヴィア・フェラータ（イタリア語で「鉄の道」という遊びらしい。世界で三〇〇以上）のルートがあり、ここは日本人が開発した世界最高所のルート。

食堂のオープンを待ちかねて大いに飲み、空腹を満たした。無事全員登頂の高揚感とアルコールで話がはずんだ。山田さんは、アマゾンなど海外での探検や登山を何回もしている。佐薙さんと小島さんは、言うまでもなく長い海外駐在を経験している。私も少々だが

海外を飛び歩いたことがある。そんなわけで海外事情や異文化体験の話題に盛り上がっていると、例の美女が通りかかった。これから下山して、コタキナバルへ車を飛ばし、最終便でクアラルンプールまで帰るのだそうだ。間に合うのだろうか。

二月二一日 八時一五分、小屋を出発。雨だが、登頂を終えての下山とあればあまり気にならない。登りの時とは違つて、ベンションさんが花を見つけては教えてくれる。その観察に気を取られている間は膝痛を忘れた。

小屋を出たところで、嘴が黄色で、全体に茶色っぽい鳥。佐薙さんの同定、説明によると、和名でタイワンツグミ（またはシマツグミ）という鳥で、台湾・東南アジア・ニューギニアに棲息するとのこと。

蛇紋岩帯では、Tea Plant。その名のとおり、お茶の花に似た白い花をつけている。葉はビタミンCが豊富だ（壞血病予防のためにキャブテン・クックが煎じて船員に飲ませたらしい）。

樹林帯に入つて、ベンションさんが登山道の奥を指して「Nepenthes」と言つた。念願の食中植物「ウツボカズラ」Pitcher Plantだ！その姿形は、まさに「ピッチャード」であり「うつぼ」（矢を入れて腰に付ける武具）である。

佐薙さんに「日本にあるのか？」と聞かれたので、「あると思います。いかにも訓読みの和語のようですから」と推定答弁をしたが、これが大間違い。帰国後に訂正のメールを出すはめになった（牧野富太郎の図鑑で調べたら「日本ではしばしば温室で培養」）。

下るにつれて、形・大きさ・色の違うさまざまなウツボカズラにお目にかかつた。キナバル公園には、全世界で七〇種のうちの九種があるらしい。シヤクナゲは二六種あるが、我々が見たのはそのうち五六種。ランはキナバル公園になんと一二〇〇種。このような豊かな植生が、イギリス植民地時代に本国のプラント・ハンターをボルネオに引きつけた。キナバル山の最高峰にその名をとどめている Sir Hugh Low もその一人である。

最後に、薄いピンク色のキナバル・バルサム。それを見て、一三時二五分に登山口ゲートへ戻つた。この間、二日半。同じルートを、驚くなれ、二時間一一分四五秒で往復した人がいる（ここは国際山岳マラソンのコースになつていて、二〇一二年の二六回大会で優勝したスペイン人の記録）。

PHQで王さんが待つていた。「登頂証明書」をもらって、ベンションさんとガイドにありがとう、さようならを言い、コタキナバル行きのワンボックス車に乗り込んだ。

よる)。

山田さんは、連日、朝夕のジョギングに精を出した。その山田さんの希望で、舟でサビ島に渡った。手つかずのビーチがあるが、までは島を一周するトレッキング。この時のガイドは木や鳥や花に詳しくて、満足した。ビーチに戻つて、山田さんと小島さんは珊瑚礁の海でシュノーケル遊び。私は生まれて初めてのパラセーリングを楽しんだ。

三日三晩おいしい食べ物とお酒を堪能した。まずは、小島さんの発案でイタリアンとワイン。連日のローカル・フードに少し飽きていたので、どんどんお腹に入った。いい発案だった。次は、観光客が決して行けない中華料理のお店。私の知り合いの中国系マレーシア人が、クアランプールから飛んできてくれる。輸出の仕事で東南アジアを飛び歩いていた時に、売り込み先の総代理店にいた男で、実に二五年ぶりでの再会。思わずハグした(生まれて初めて?)。この男、ド・ハイドが設置されている。一帯は、広大なマングローブの湿地帯で、小川で海とつながっている。ちょうど上げ潮の時間帯。湿地が海水で徐々に満たされてゆくのを見ながら、約三キロの木道を歩いてバード・ウォッチング。日本でも見られるコサギ、ササゴイ、それにシギの仲間を見た(佐薙さんの判定に



サビ島でトレッキングを楽しむ

お返し。ご所望のタラバガニの特大を付けて。

**二月二十五日** 関空に向けて離陸したマレーシア航空機は、すぐ南シナ海に出て高度を上げた。機体の右手には、雲にかなり隠れているがキナバル山。それを見ながら、ふと思いついた。最終氷河期に、海面が今より一〇〇メートル以上も低下して、南シナ海は陸棚であった。そしてフィリピン・ボルネオ島・ジャワ島・スマトラ島などを含めて「スンダランド」となつてアジア大陸となががつっていた。そうだとすると、アフリカを出てこのあたりまで移動してきたヒト属(原人・旧人・新人)は、その後のオーストラリア・ハワイ・ニュージーランド・イースター島などへの「グレート・ジャーニー」の途中で、やはりキナバル山を仰ぎ見たのだろうか。帰国したらこの面白いテーマを調べてみようと思いながら、いつの間にか眠りに落ちた。

**二月二二日～二四日** 佐薙さんの提案で、「コタキナバル・ウェットランド」へ行つた。ここは以前「コタキナバル・バード・サンクチュアリ」と呼ばれていただけあって、バード・ハイドが設置されている。一帯は、広大なマングローブの湿地帯で、小川で海とつながっている。ちょうど上げ潮の時間帯。湿地が海水で徐々に満たされてゆくのを見ながら、約三キロの木道を歩いてバード・ウォッチング。日本でも見られるコサギ、ササゴイ、それにシギの仲間を見た(佐薙さんの判定に

## 気がつけば山ばかり

藤原 朋之（昭44年卒）

2005年の会報104号にそれまでの山の事を投稿してから、余勢を駆って106号と111号にも折々の想いを掲載して頂きました。今読み返せば山関連の自分史になつていて会報様々です。今回はその後5年の山行人生を振り返り整理してみました。

### 一、気がつけば山ばかり

還暦が過ぎ人生二順目のスタート年はあちこちで落ちまくり何をやっても上手くいかない、というのが111号での投稿内容でしたが、あれから5年、61歳の誕生日が過ぎてからは再び順風満帆コースに乗ることができました。

63歳後半からは年間100日ペースです。

クライミングに集中し山登りがおろそかになつた年の定期健診で糖尿病数値が急速に悪化し慌てて山行回数を増やしました。泳いで

ないと死んでしまう回遊魚と同じ状態で歩いてないと健康が維持出来ない宿命です。幸い

足腰には故障がないので、あと4年70歳までは100日山行を続けられるかなと思つています。下半身が元気な分、頭の毛はなくなり、更に頭の中に至つては空っぽです。神様はバランス感覚が大変優れています。

山登りのスタイルも変わりました。アルピニズムを追求して海外へ展開するというのが定年後のイメージでしたが、いまや完全な低山志向です。日本中の目ぼしい山は殆ど登つたと不遜にも考えていた自分が恥ずかしいほど、日本は山国でした。毎年年初に手帳に今年登る山候補を記入するのですが、毎年多数の登り残しがでる上に、新規に登りたい山が追加される為、今現在あと10年分の山在庫があります。

### 二、100の山に100の喜び

#### 三、駅から駅へのハイキング

串田孫一の心境にはほど遠いとは言え、低山歩きで感じる喜びも大きなものがありまます。一橋山岳部のひたすらピークを目指した花鳥風月とは無縁な山歩き？から漸く脱却し、それぞれの山行に様々な幸せを感じられる年齢になりました。とはいえるともと花や鳥には疎い気質ゆえ、山岳展望が主な目的になります。

深田百名山の阿寒岳と大台ヶ原の2山に登場する松浦武四郎なる人物がいます。私がその名前を知ったのも深田百名山を読んだ時が初めてでしたが、その後彼の足跡を知ればしるほど共感するところが大きくなりました（アイヌを擁護して松前藩に命を狙われたり、

なります。

若い頃に登った山を老年に麓から眺めて暮らす楽しみを書いた記事を読んだことがあります、懐かしい思い出が一杯ある山々を遠くからまた近くから見るのは格別です！ とりわけ私の好きな残雪期の山は見飽きることはありません。松本郊外の光城山からの北アルプス・パノラマや、中村（雅明）さんと二人で登った阿能川岳での白き谷川連峰の輝きはまだ克明に記憶に残っています。

先週GW前に歩いた、長野の山荘から峠越えで甲府にでたトレッキングでも、木賊峠からの富士山や観音峠近くの林道からの八ヶ岳及び甲斐駒ヶ岳が予想してない角度からいきなり現われびっくりすると同時に感激です。近年は異常気象の大雪のせいで通行止めの林道が多く周りに車も人もいない大展望を独占する機会も増えています。

明治政府から提供された役職を投げ捨てたり  
との反骨ぶりも気にいっています)。

彼は晩年旅人として全国の山を歩いている  
わけですが、一日60～70kmのペースで踏破  
しています。彼に影響されたところもあるの  
でしょうが、私も山に出かける時は車・バス  
は使わず駅を降りたらそこから歩き始めて、  
最後の電車駅まで歩き通すように心がけてい  
ます。極力長い距離を早足で歩けば後半にハ  
イカーズハイといった無心状態になることも  
あり、私なりのストレス解消法です。

バスや車に頼らないと最初から決めておけ  
ば、地図をみて計画を考えるのも楽しみの一  
つになります。林道が奥まで延びて麓からの  
昔道は大半消えていますが、ネットなどで情  
報を得ながらコース取りを設定し上手くいつ  
たときは達成感があります。

昨年人数をまとめて登山口までタクシーで  
往復し登る計画を立てた高原山が中止になっ  
た時も、地図を見ているとどうやら川治温泉  
駅から日帰り往復が可能になりました。

鶏頂開拓村への廃道も使えそうなので単独  
行を決断しました。一部藪こぎもありましたが  
が無事登山口へ辿りつけましたものの、西平  
岳からの下山は奥まで延びた、通行止めもない  
のに車も人も全くいない（公共投資の無駄  
使いの典型です）立派な林道を利用し藤原駅

の濃密な時間でした。

その後、本間さんから組長とおだてられ、  
数回、山梨百名山を計画しました。70歳まで  
は山登りを頑張ろうと思っていた私ですが  
80歳でなお元気に活動されている佐薙さん  
や、竹中会長をみて、80歳でエベレスト登頂  
に目標を見直し設定です。“組活動”は暴対  
法施行で今は下火ですが、中村さんが月2～  
3回の山に付き合ってくれています。

秋には伊勢の田形弁護士にお願いして、伊  
勢駅から外宮～内宮～宇治岳道～朝熊ヶ岳を  
計画しています。針葉樹会でのつながりは今  
後も発展させたいと考えています。

針葉樹会員の皆さん、気が向いたら長野の  
廻り目平近くの山荘に来てください。一緒に  
遊びましょう！



中村（雅）さんと藤原（左）

#### 四、針葉樹会での山行

なんといっても、この5年での最大のト  
ピッククスは針葉樹会員の皆さんとの山行が始  
まったことでしょうか。2010年10月（私が  
63歳の年です）の北岳バットレスに召集され  
会の仲間入りです。撤退開始後テント場へ  
の帰途2時間、中川さんから昔の山・人につ  
き一杯話を聞かせてもらいました、一期一会

### ■中村保会員が第2回

### 「梅棹忠夫・山と探検文学賞」を受賞

中村保著『最後の辺境 チベットのアルプス』が第2回「梅棹忠夫・山と探検文学賞」を受賞し、それが『山と渓谷』5月号で紹介されましたので、その記事を紹介します（『岳人』5月号にも同様の記事が掲載されました）。

### 〈中村さんより〉

それぞれの記事の末尾に次の新しいプロジェクトとして「チベットのアルプスと辺境地図集」（英・日・中三カ国語）が触れられています。B4サイズで概説・地図・写真各50頁、計150頁の構成です。地図・写真はオールカラー、写真は内外の登山家、写真家（四川在住、大川健三さん）の皆様の協力も得ています。この地図集は1998年から15年間18回の踏査行を共にした盟友永井剛さんとの共著で、作図は竹内康之さん、中国語訳は松山峰子さんに担当して頂いています。来春／夏に日本山岳会／横断山脈研究会の名で出版される予定です。

### ■新緑の宴を開催。

5月18日 国立部室

【参加者】佐藤（力）、竹中、佐藤（久）、宮武、井草、兵藤、松田、川名、前神、学生＝小宮山（4年）、町田（4年）、峯（4年）、伊藤（3年）、原（2年）、菊田（国立音大2年）、高橋（東京女子大2年）

大学の学内での飲酒禁止方針に従い、ことは部室に集合し、そこから国立駅前の居酒屋に移動、宴会をおこなった。上記7名の学生が集まり、久しぶりに多くの部員（全員が入部を決めたわけではないが）を見た気がする。このほかに興味を持っている一年生がいるとか、3・4年の部員が2人いるので全員が入部すれば10人となり、立派な部になると期待をもつた。

この宴も数年前は学生がお客様状態だったが、今年辺りからは学生が段取りしてやるようになり、本来のすがたに戻ってきている。こうした宴会に出席するOBもだんだん顔触れが固定してきた感があるが今回学生の参加が多かつたので新鮮な感じを受ける。特に出席した学生7名のうち3名が女子学生なので

一段と華やいだ宴席となつた。

いろいろ聞いてみると高校時代に山岳部を経験した人はいないようだが、親がアウトドア好きで大学では自然と付き合うのもいいかな、と思っている人もいた。OB側からは山岳部の良さを各人の経験からあの手この手で説明したが、就職でも有利になるという話が一番効果があつたかも知れない。

今後の活動はハイキングの延長のような形になるのかもしれないが、どんな形であれ山が好きという学生が一人でも増えればそれがベストとおもう。より高みに、より困難に、という話もOBからだしたが、現在はその前段階ということなのでしょう。現在は4年生が4人いて全員就職が内定しているので、これからガンガン山登りをやってくれればいいな、と強く思つた次第。  
（前神記）

### ■お便り

1981年ホワイトセールにて遭難した中村宜幸さんのご遺族である中村宜興様からご連絡を頂きました。針葉樹会報第126号にホワイトセール関連の記事が記載されていると耳にし、該当の冊子を是非欲しいとの内容でした。

# YK FRONTIER CAMP 01

たノンフィクション作品に贈られる、第2回梅棹忠夫・山と探検文学賞に、中村保氏の「最後の辺境チベットのアルプス」の受賞が決まった。

中村氏は、1990年から「チベットの東」(中国・雲南省、四川省、東チベットなど)を30以上踏査してきた。当地は、政治的理由により長く禁断の地とされており、ほとんどが未知・未踏の世界であった。その成果は、「ヒマラヤの東『深い邊境の国』チベットのアルプス」すべて「山と渓谷社」などにまとめられ、秩父宮記念山岳賞を受賞するなど高い評価を受けた。

中村氏の踏査行は日本山岳会の英文ジャーナル「Japanese Alpine News」で掲載されたことにより海外でも注目を浴びる。著名クリエイターであるミック・ファウラー(英)による四姑娘山南壁の登攀や、チャド・ケロッグ(米)の同地における数々の記録は、中村氏の写真を見たことがきっかけとなり成し遂げられたものだ。

今回、「梅棹忠夫・山と探検文

学賞」を受賞した「最後の辺境チベットのアルプス」は、これまで行なってきた中村氏の踏査行の集大成ともいえるもの。この著書に対し、フィールドワークの重要性や地図の正確さ、中村氏の飽くなき探究心などが評価され、受賞

が決定した。

中村氏からは、今回の受賞を受

け、以下のようなコメントを寄せていた。

「偉大な先輩にちなんだ賞をいた

だけることは、この上ない榮誉で

ある踏査と海外への発信を通じて、

世界の「オンライン」になれた

ことの感概はひとしおです。

次の、英國登山界の期待に応え

てライフワークとして取り組む

チベットのアルプスと辺境の地

です。08年の英國王立地理協会のバ

スク・メダル受賞に次いで自分史

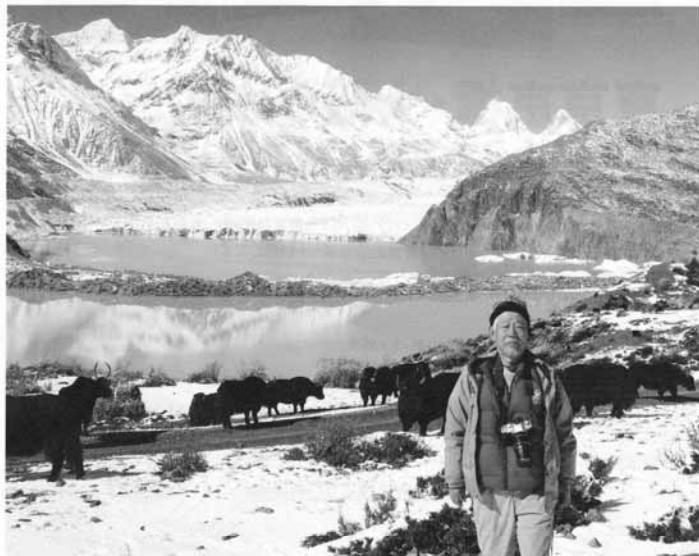
に金字塔として残ります。文字ど

おり「最後の辺境」の22年にわたり

しよう

## 第2回「梅棹忠夫・山と探検文学賞」を『最後の辺境 チベットのアルプス』が受賞

中村 保=写真提供 神谷浩之(本誌)=文



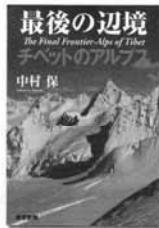
2006年8月に訪れたLhagu-Kangri Garpoにて



中村 保  
(なかむら・たもつ)  
1934年生まれ。日本山岳会名誉会員。『Japanese Alpine News』編集人。『The Alpine Journal』『The Himalayan Journal』など海外山岳誌への寄稿や、世界各地での講演も行なう。

梅棹忠夫・  
山と探検文学賞

生懶学にはじまり、民族学、比較文明学などで学術的偉業を残した梅棹忠夫氏を称え、2010年に創設。



『最後の辺境  
チベットのアルプス』

東京新聞 03-6910-2527  
480ページ 3000円 12年4月刊

針葉樹会報 126号で佐藤久尚さんが「イ

ンド ヒマチャルプラデイシュ・ヒマラヤの旅」と題する記事を寄稿されています。中村雅明さんと共にホワイトセール半周のトレッキング、ローカルバスの旅、中村宜幸さん含め遭難された3名の方の捜索協力依頼の三つを目的として1ヶ月の旅をされた紀行文です。

ご遺族には針葉樹会報126号を3部お送りいたしました。針葉樹会への返礼の手紙を頂きましたので転載させていただきます。

編集子

「去る者は日日に疎し」は人情です。

90年来の針葉樹会の絆に深謝申し上げます。

昨年9月のOBの方々による困難にして細心の追悼山行、ただただ念佛を唱えるばかりです。

皆様方のご健康とご多幸をお祈りいたします。

亡中村宜幸 父 宜

#### 【資料・写真送付先】

〒181-0013 三鷹市下連雀2-4-12

中村雅明 電話 0422-46-9792

Eメール mnakamur@parkcity.ne.jp

※デジタル化された資料、写真をEメールで送つていただけると大変有り難いです。もちろん印刷物でも結構です。

#### ■図書幹事からのお願い

一 『針葉樹第15号』の【編集後記】に「両表(年表、山岳部在籍者名簿)の改定は図書幹事の責務とし、最新版をホームページに掲載する」と書きました。年表、名簿の追加訂正が必要でしたら図書幹事までお知らせ下さい。なお「名簿」391頁の入学年1974(S49)に掲載した永田一彦を永戸一彦にお詫びして訂正いたします。

二 「年表」末尾に資料を2篇掲載しましたが、将来に残すべき山行記録・覚書等をお持ちでしたらお寄せ願います。資料3、4……として追加いたします。

三 年表に記載した事項の写真をお持ちでしたらお寄せ願います。年表原本に貼り付けて保存します。既に岡田健志(昭和42年卒)会員から1965年3月穂高明神岳での春合宿集合写真、旧部室写真、1972年12月創部50周年記念祝賀会写真を頂きました。

# 三月会通信

■平成25年2月18日■

【出席者】（上原）、竹中、佐藤（久）、岡田、  
高崎（俊、記録）

▽例年より寒い冬のためか、キナバル遠征組は準備に忙しいのか、出席者は5名でした。やはり、この人数では寂しいものです。

▽上原さんが会の初めに少し顔を出されました。「山恋しくて鳳凰三山」という歌を紹介されました。住友商事山岳部の歌だそうです。当時の「部員」の方々による作詞作曲だそうです。楽譜もあります。

▽「如水会報」では、今年「セピアの世界から」という写真1ページものの特集を組むようです。クラブ活動の今昔を紹介するのですが、4月号には山岳部が紹介されます。これに投稿するにあたって、写真の選定をしました。新・旧の部室の写真は直ぐに決まったのですが、もう1枚の選定に苦しみました。プカヒルカ、サラグラールなどの海外遠征は「セピア」の範疇としては相応しくなく、昭和10年代の写真を探して

載せようという事になりました。この会の後、倉知さんに相談した結果、山田（亮）さん、大塚さんによる北穂高岳滝谷第4尾根巣冬期初登攀（昭和14年12月）の写真を投稿する事にしました。

▽最近は、いくつかのパーティーが「北高尾山稜」を歩いています。雑踏の高尾山は避けたいですが、静かな山道の「北高尾」はオススメです。登山道はしっかりといるものの、かなりの数の凸凹（登り下り）があつて、距離もそれなりにあつて、十分に楽しめるルートだそうです。

▽この4月は、新入部員獲得の時期になります。現在、部員の大半が3年生で、就職活動に専念せねばならず、OB側サポートが必要になります。入学手続きの日に「立て看板」を出すのが一番効果がありそうだ、という事になり、学生担当の幹事さん方に頑張つてもらう事にしました。（早速、3月初めに打合せ会を持つようです。）

▽倉知さんの「チベット民族国家崩壊に至る抗争の歴史米国図書紹介と論考」を既に読まれた方々からそれぞれコメントがありました。（2月22日に新宿区スポーツセンターで行われた中村（保）さん、倉知さんによる講演会は盛況だったようです。）

▽夏合宿の「ボッカ」の話で盛り上がりまし

## ●山行記録

竹中 12/20

浅間尾根（浅間尾根入口～

）

払い沢の滝～日本山岳会多摩支部平日山行

1/19

笹尾根

（雪の尾根を登る）

日本山岳会初級登山教室、実地山行

岡田 1/19

塔の岳

（大倉尾根から）

単独

2/10

景信山

～北高尾山稜

（佐羅さんと）

中村（雅） 12/28

筑波連峰

・雨引山

藤原さん

と二人

加波山

に縦走の予定が、

手前の林道をそのまま麓まで下つてし

まつた。水戸線の岩瀬駅から福原駅までの

「駅から駅まで

」山行

1/3 上州三峰山藤原さんと二人、ス

ノーシュの今期使い始めのつもりは雪

た。開始早々事故で中止になつた合宿で、涸沢まで運び上げた食料を上高地に下した時、重過ぎてザック麻痺になり、腕が上がらなくなつた、信大病院で診て貰つたが良い治療法は無く、「アリナミンの大量療法」で時間をかけて直した、燃料のプロパンガス・ボンベはパッキングに苦労した。背負子も当時はアルミ製などなく、キスリングに入れて、周囲を私物で囲んでもバランスが取れず、担ぎにくかつた、ガロン缶から石油が漏れ出して背中に火傷した、等々。

が少なく空振り。後閑から往復歩き

1／26 北高尾山稜前半（高尾→城山→景  
信山→小仏峠→高尾）藤原さん、宮武さん  
と3人、城山から草戸山までの南高尾山稜  
も歩く予定なるも時間切れで、小仏峠から

下山

1／31 藤野→岩戸山→鷹取山→能岳→  
八重山→上野原。藤原さんと二人、藤野駅  
から上野原駅までの「駅から駅まで」山行  
2／7 四方津→不老山→権現山→用竹  
↓上野原。藤原さんと2人、四方津駅から  
上野原駅までの「駅から駅まで」山行。権  
現山からの展望良し

2／12 日光・雲竜渓谷。藤原夫妻、中村  
夫妻、他3名、行きはゲート近くまでタク  
シー、帰りは日光駅まで歩き。スノーキ  
シュー、ザイル持参するも使用せず

佐藤（久）なし  
高崎（俊）なし

### ● 山行計画

竹中 3／1 ニセコ スキー（チセヌプリ、  
シャクナゲ岳）。小野さん企画に参加（他に  
川名さん）  
中村（雅） 2／28 中央沿線・御前山五山  
巡り。上野原駅から鳥沢駅までの御前山と  
名の付く山を歩き尽くす山行。藤原さん夫

妻、他2名と5人で

### ■平成25年3月18日■

【出席者】（上原）、三井、遠藤、竹中、小島、  
佐藤（久）、（兵藤）、高崎（俊、記録）

▽寒い冬から、いきなり「夏日」になつたり、  
また直ぐ冬に戻つたり、かなり激しい「三  
寒四温」です。共立講堂の前のしだれ桜の  
1本は既にほぼ満開でした。花見の準備は  
慌ただしくなつてゐる事でしょう。

▽先月も話題になりましたが、「如水会報」では、今年「セビアの世界から」という写真  
1ページものの特集を組んでいます。4月  
号で紹介される「一橋山岳部」の写真3枚  
の選定に苦労しました。結局、会報編集部  
の意向も取り入れ、Cカントを登る山田  
(亮)さんの姿を大塚さんが撮影された北穂  
高岳滝谷第4尾根巣冬期初登攀（昭和14年  
12月）の様子、新部室の外観、に加えて、  
昭和40年春の合宿（岳沢一周と明神東面の  
雪稜登攀）最終日の集合写真（S42年卒岡  
田さん提供）になりました。

▽上原さんの紹介された「山恋しくて鳳凰三  
山」の楽譜は、既に北杜市役所韮崎支所の

観光課に送付済みだそうです。ここがどう  
動くか反応を見て、南アルプス市、芦安山  
岳館、芦安ファンクラブ等に働きかけるか  
どうか決めたいそうです。CDを作成して、  
夜又神峠小屋に寄贈する事も考えられて  
います。

▽2月下旬のキナバル遠征隊は全員登頂さ  
れ、無事帰国されました。メンバーは、佐  
薙さん、蛭川さん、小島さんに加えて静内  
山岳会の山田さん、の4人。  
18日、関西空港からコタ・キナバルへ。19  
日、登山口でガイドとその息子のボーター  
と合流後、車で標高1850m地点まで。  
ここから歩いて、標高3200mのラバン  
ラタ小屋で宿泊。この小屋は前評判とは違  
い、奇麗に整備された清潔な小屋だったと  
か。20日、午前2時起床、3時出発、無事  
登頂の後、ラバンラタ小屋にもう一泊して  
下山。老人登山者は日本人のみ、ガイドを  
一人雇つた単独行の若者が目についたそ  
です。キナバルは19世紀末に英国人のプラ  
ント・ハンター Hugh Low が希少植物を求  
めて登った事でも知られていますが、蛭川  
さんの花に関する質問攻めにガイドも苦労  
したことでしょう。詳しくは、後刻、蛭川  
さんから報告がある予定です。

▽キナバルに行き損なつた遠藤さんは、山崎

(特別会員)さんと、彼の「家出カ」で精力的に百名城周りを続けられています。最近は、丹波篠山の、霧で有名な「武田城」奈良の「高取城」、恵那山直下の「岩村城」等に出掛けられています。詳しくは、遠藤さんのホームページ・ページ、遠藤晶土の百名城をゆく」をご覧下さい。

▽竹中さんから、東急百貨店・東横店(渋谷駅)で開催される「富士山 大山行男 写真展」が紹介されました。4月4日から9日まで、連日トークショー＆サイン会があります。

▽「山の日」制定協議会による「山の日」制定プロジェクトが動き始めています。山岳5団体(日本山岳協会、日本労働者山岳連盟、日本山岳会、日本山岳ガイド協会、日本ヒマラヤ・アドベンチャーラスト)が協力して進めています。6月2日(日)には、日本山岳会東京多摩支部が中心になつて、高尾山のケーブル駅、薬王院、頂上の3カ所でキャンペーン・イベントが開催されるようです。

▽小島さん以下精鋭メンバーで計画されている薬師岳・赤木沢遡行が今年も敢行されます。既に何回か実行に移されていますが、どういう訳か未だ成功していません。今年は若手(?)の前神さん、兵藤さん、佐藤

(活)さん等強力な助っ人を得て、挑戦する予定だそうです。今度こそ完登して下さい。

▽一橋山岳会でも、過去、遭難事故で亡くなられた方々がいらっしゃいます。中には、慰靈碑が設置されながら、所在地が判らなくなつたりしている碑もあるようです。友

田さん(北ア、奥木挽山)、前田さん、吉沢さん、長沼さん(奥秩父、笛吹川東沢)、山

中さん(谷川岳、マチガ沢)、中村さん(鹿島槍、天狗尾根)、平川さん(前穂高A沢)、橋本さん(甲斐駒、赤石沢奥壁)、大塚さん(北海道神武威岳)、細野さん(剣岳、源次郎尾根側壁)の碑があるのは確認されていますが、早いうちに正確な設置場所等を記録として残しておく必要があろう、という結論になりました。広く情報提供をお願いしたいと思います。総務担当幹事高崎(俊)までご連絡下さい。

●山行記録  
21日 下山

高崎(俊) 3/14～15 硫黄岳  
14日 美濃戸口→赤岳鉱泉

15日 赤岳鉱泉→赤岩の頭→硫黄岳を往復→美濃戸口。昨年のリベンジ。移動高の下、快適に雪山を楽しんだ。

中村(雅) 2/28 中央沿線・御前山五山巡り。藤原夫妻と他2名と5人で、上野原駅から梁川駅までの御前山と名の付く5山をハイキングした。

3/8～9 戸隠スノーシューリン間歩き。家内と2人。越水ヶ原の戸隠小舎に泊まして奥社、鏡池を往復。鏡池からの戸隠連峰の眺めは素晴らしい。

3/10 東京多摩支部・秋川丘陵ウォーキング。1. 5年の間に入会した会員との懇親

山行。武藏増戸～五日市

3/12 如水会町田支部歩こう会、松田山の河津桜 新松田～松田山～アサヒビール神奈川工場見学

3/16 東京多摩支部・初級登山教室 百歳山～扇山。教室受講者と富士山眺めながら歩く

小島 2/19～21 キナバル山登頂

18日 関西空港→コタキナバル  
19日 コタキナバル→ラバンラタ小屋

20日 ラバンラタ小屋から頂上(4095m)往復

→赤杭尾根→古里駅 藤原さん、他1名と  
3人 誰にも会わず

上原 なし  
三井 なし  
遠藤 なし  
佐藤（久） なし

### ●山行計画

竹中 4／7 奥多摩山開きの後、むかし道。

多摩支部メンバーと

4／21 J A C 越後支部メンバーとカタ

クリ観察に

中村（雅） 3／25 道志・鳥の胸山 藤原

さん他3名と5人、車山行

4／13 奥多摩天祖山

4／18 坪山、八重山

### ■平成25年4月15日■

#### 【出席者】

三井、竹中、小島、佐藤（久）、岡  
田、中村（雅）、宮武、高崎（俊、記録） 学  
生…小宮山、町田、峯

▽普段の開始時間に先駆けて、小島さんの呼びかけで、現役学生との懇談会がありました。就職活動が終盤に入った学生（4年生）

3人が参加してくれました。新入生・新入部員の勧誘活動を何時・どう進めるか、去年に引き続き一般学生を引率しての富士登山をどうするか、等々を話し合いました。

▽「花見の宴」に替わって「新緑の宴」が大学のホーム・カミング・デイに当たる5月18日（土）に国立の部室で開催されます。

「学内飲酒禁止」令を遵守して、一次会は部室でアルコールなし、二次会を学外で、という大筋が決まりました。学生さんの意欲的に取り組んでいる姿が印象的でした。頑張つて下さい。

▽一橋山岳部のホームページに加えて、最近、FaceBookにもサイトが出来ました。山岳部活動の近況、トピックスを見る事が出来ます。ご覧になつた会員からの「いいね！」を期待しています。

▽就職先の決まった・決まりつつある学生さんに対して、OBから、若い内に海外留学、海外駐在を経験しておくのが良い、という助言がありました。視野が広がる、転職を考える時に有利になる、国内より大きな仕事が出来る、等々。その昔、海外遠征には文部省の体育外貨枠、海外出張には通産省の業務外貨枠、等の獲得が必要だった頃の経験者の述懐でした。

▽昨年、創部90周年記念事業の一環として取

り組み、実績の上がつた富士登山、芦安村登山道整備を今年も継続したいという希望が会員から寄せられています。富士登山については、新入部員獲得にも効果がある事が実証されたので、今年も是非実現したいものです。年々、富士登山が盛んになり、ツアーハイカーや、早めの予約（特に山小屋）を要請されています。宮武さんが中心になって準備を始めましたが、山行幹事・若手OBの積極的な参画を期待しています。芦安村登山道整備に関しては近々、関係者が集まつて準備を始めるようです。

▽岡田さん、中村（雅）さんが、今年も雪の八ヶ岳に登つて来ました。3年前の4月は赤岳に登つたので今年は阿弥陀岳に挑戦です。ご覽になつた会員からの「いいね！」を期待しています。

▽就職先の決まった・決まりつつある学生さんに対して、OBから、若い内に海外留学、海外駐在を経験しておくのが良い、という助言がありました。視野が広がる、転職を考える時に有利になる、国内より大きな仕事が出来る、等々。その昔、海外遠征には文部省の体育外貨枠、海外出張には通産省の業務外貨枠、等の獲得が必要だった頃の経験者の述懐でした。

済んだ、との事でした。

▽ゴーレンウエークの学生さんの山行計画の話から、その昔、昭和40年代、遠見尾根（大遠見）とか大樺沢にテントを上げて、現役学生・O.B.共々残雪の山を楽しんだものだ。村尾・近藤・望月・山田（亮）先輩などと。今年は、計画するには遅すぎるので、来年はこんな計画も立てたいものだ、という話になりました。是非、実現させたいものです。

▽そろそろ山蛭、マダニに注意しなければならない季節に入りました。ヒルは、アルコール・塩・酔などで対応出来ますが、ダニは要注意です。アルコール等で注意深く取り除く事が考えられます。が、喰いついた頭部が体内に残る危険があるので、医者を訪ねて除去して貰うのが安全のようです。ご用心方。

### ●山行記録

三井 なし  
竹中 4/7 奥多摩むかし道（奥多摩駅→小河内ダム）（東京多摩支部メンバード）奥多摩町の山開き神事後、奥多摩の山腹に山ざくら、新緑が萌えるのを眺めて歩く。  
4/9 新百合丘→國師大橋（如水会町田支部）麻生川、鶴見川畔を歩くが葉桜に。

佐藤（久）なし

岡田 4/9～10 八ヶ岳・赤岳。中村さんと一緒に

中村（雅） 4/9～10 八ヶ岳・赤岳。

4/9 美濃戸口→赤岳鉱泉

4/10 赤岳鉱泉から赤岳往復、美濃戸口へ下山。岡田さんと二人 文三郎尾根から阿弥陀岳往復の予定なるも、稜線に出た時点にガス・強風のため赤岳へ変更。

高崎（俊） 4/9 丹沢・塔ノ岳 大倉バ

ス停登山口→（大倉尾根）↓塔ノ岳→三ノ塔→（三ノ塔尾根）↓風の吊り橋→大倉バス停登山口。トレーニングと体力測定を兼ねて。春霞に富士山を望む。

### ●山行計画

三井 5/11 懇親山行（飯盛山） 金子さんの計画通り

竹中 4/20 東京多摩支部の初心者登山教室・三頭山  
4/21 越後・六万騎山、坂戸山（カタクリ観察会）東京多摩支部と越後支部との交流  
中村（雅） 4/18 坪山ひかげつづじ山行、  
藤原組山行  
4/29 天祖山 藤原さんと二人、三峰神社から日原まで8～9時間

5/11 懇親山行・飯盛山 野辺山→飯盛山→清里→アダージオ

5/12 大谷原、中村慎一郎君追悼行

儀、宮武、藤原、西牟田、金子、松尾、戸川各氏と一緒に

5/13 堂津岳 鬼無里・奥裾花自然園か

ら往復（残雪の戸隠、妙高連峰の大展望台）。藤原さんと二人、その他のメンバーは奥裾花ミズバショウ見物

5/14 戸隠散策 ミズバショウなど見物、室内と二人

### ■平成25年5月20日■

【出席者】 上原、三井、佐藤（久）、岡田、中村（雅）、高崎（俊）、記録）

▽今回も出席者は6名と少なめでした。つい最近まで常連だった佐薙さん、高橋さん、本間さん等の顔が見えないのは寂しい限りです。また、竹中さん、小島さんは他の用事が色々あるようです。忙しいのに越した事はありませんが、この会のプライオリティーが下がってしまったのでしょうか？  
▽上原さんに寄りますと、出身高校（大阪府住吉高校。上原さんが一年生の時に「山岳

部」が出来たそうです)の「山岳部OB会」

の解散会に参加して来た、との事でした。巷では、「山ガール」を筆頭に、若い人たちの間で、山登りが復活し始めたようなムードがありますが、未だ未だ本物ではないのかも知れません。ただ、近頃の山を歩くと、一時の中高年ツアーディナー登山者の行列が少しほ減つて、若い人たちの少人数パーティーが多く見られるようになつたとの印象もあります。

▽先週(18日、土曜日)開催された「新緑の宴」には「新入部員」候補が多数? 集まつたようです。ラクロス部からの3年生、他大学からの2名を含む2年生3名(全員美しい女性)。現在の部員5名(小宮山部長以下、峯、町田、川尻、細川)のうち主力の3名が4年生なので、どうしても後輩の育成が急務です。大学構内での飲酒が厳禁されているので、部室に集合した後、近くの食堂に場を移して、遅くまで歓談したとの事でした。

▽この宴に出席した佐藤(久)さんから、会員の皆さんへのお願いがありました。学生サポートの一端にもなりますが、使っていない寝袋・ザック等の山道具をお持ちの方々は、是非、山岳部に寄贈頂きたい。山靴は自分で調達するにしても、その他の道

具を一度に買い求めるには負担が大きいので、この面での支援を是非お願いしたい、との事です。会員の皆様のご理解、ご協力ををお願いします。

▽この夏には、小島さん、中村(雅)さん、

川名さんが過去何度か試みながら、達成しない、薬師岳・赤木沢の計画が、もう一度挑戦されます。今回は、力強い助つ人

に若手? OBから前神さん、兵藤さん、佐藤(活)さんが参加されます。一緒に挑戦

されたい方がいらっしゃれば、成功体験を

共有したいそうです。実行は8月初旬です。

▽5月連休の鹿島槍に岡田さん、吉沢さん(昭和42年組)が挑戦しました。爺岳の南尾根から冷池小屋に宿泊、翌日鹿島槍を往復して下山、の計画でしたが直ぐ近くで滑落事故があつたり、天候悪化の予報だつたりして、登頂は諦めたようです。アイゼンを新調して向かったのですが、残念でした。来年、この時期に再度挑戦するそうです。

▽八ヶ岳での懇親山行に続いて、1968年5月に鹿島槍天狗尾根第一クーロアールで

滑落して亡くなつた中村慎一郎君の追悼登

山がありました。参加者は、中村(雅)・俵・富武・金子・西牟田・松尾・戸川。遭難碑は見つからず、「山讚賦」を歌つて追悼しました。

## ●山行記録

上原 4/16 今熊山 大学同期のミミ歩

グループ、塩川さんも一緒に。

中村(雅) 5/3 足利駅→足利行道山→深高山→石尊山→小俣駅。藤原さんと二人。足利の山は初めて。明るく気持の良い尾根歩き。新緑が良かつた。

5/6 長沢背稜・天祖山 藤原組山行。三峰神社→芋の木ドッケ・長沢山→天祖山↓日原

5/11 懇親山行・飯盛山→アダージオ仲田さん、三井さん、金子さん(幹事)の4人、雨に降られ展望なし

5/12 大谷原・中村慎一郎君追悼行。俵、藤原、宮武、西牟田、金子、松尾、戸川。遭難レリーフ発見出来ず。林道で山讚賦を合唱して慰靈。

5/13 奥裾花自然園から中西山→奥西山の途中の稜線まで往復。堂津岳へ登れず次回の宿題。藤原夫妻、中村夫妻の4人で。

三井 5/11 懇親山行 中村(雅)さんと同じ。

岡田 5/4(6) 爺岳南尾根→鹿島槍 鹿島槍には登頂出来ず。吉沢(正)会員夫妻と。

高崎 4/29 麦草峠→丸山→高見石→中山→白駒池→麦草峠。全コース雪道、辛う

じてアイゼンを履かずに済んだ。

## 倉知敬さんの最近の論考について

### ●山行計画

上原 5／25 明神峠→三国山→大洞山→あざみ平→立山→紅富台（4時間）ミニ歩

### グループ

中村（雅） 5／25 万二郎岳→万三郎岳。

三四郎会山行／小島、坂井、半場、佐藤（力）、

岡田の各氏と

5／30 茨城の名山はしご旅 高鈴山→

堅破山→八溝山。藤原組3人

6／3～5 6／3 回り日平

6／4 金崎山往復

6／5 甲武信岳→東沢下降 藤原組3人

6／21 丹沢・勘七の沢 藤原組山行

岡田 6／6～8 仙丈岳 吉沢（正）会員

2月22日夕刻、「地平線会議」主催で倉知会員の近著「チベット民族国家崩壊に至る抗争の歴史—米国図書紹介と論考」に基づく講演と中村保会員の昨年秋の四川・雲南踏査行のスライド上映会が行われ、前神、小林両兄と共に参加した。

会場の新宿スポーツセンター大議室には80名を超える聴衆が集まっていた。最初に司会者の江本さんから倉知、中村さんの簡単な紹介があり、更に中村さんから倉知さんは「並々ならぬ英語力、構想力で米CIAの活動について読み解いた」との紹介を経て、講演が始まつた。

### 〔講演概要〕

最近のチベットへの日本人の関わりは、この20～30年地勢的な探検を中心に中村さんが活躍して来たが、更に文化、社会面にまで視野を広げて考えると、紹介対象のこの三冊、就中「The CIA's Secret War in Tibet」は、米のCIAが誕生して初めて海外を対象に隠れ

て活動した始めと終わりの物語。この本の半分近くが注釈で、公文書等を参照した実証的な話となつてゐる。民族国家の消長の裏にあつた実証的な記述に価値があると考えて読み進めた。

話を起承転結に整理して進めると、

「起」は、第二次大戦中に米軍輸送機がラサ近くに墜落し、英國ヤングハズバンドのラサ進攻の後の英國と国民政府との角逐を中心記述（Lost in Tibet）。

「承」は、朝鮮戦争（1950／6～53／7）後、人民解放軍が東チベットへの侵攻本格化に伴つて、CIAがチベット・ゲリラ支援（養成、武器供与等）で民族国家を支える（The CIA's Secret War in Tibet）。

「転」は、国際情勢に翻弄される、中印の非同盟中立（55／4）、60年代の国境紛争（62／9）、キュー・バ危機（62／10）、インド支援、ニクソン訪中（72／2）後のムスタン放棄へ（ORPHANS OF THE COLD WAR）。

「結」は、ゲリラ戦で何をやつても効果上がらず、国連の場で討論されたが反抗も実を結ばぬまま、中共に完全に呑み込まれた（同上）。とが、結果に結びつかなかつた。

### 「チベット抗争の本質は何であつたか」

……自主独立の目的意識が欠如していた」

「チベットの独立抗争は何だったか」

……チベットという民族国家を独立させる動き→人権問題へ（120万人殺害、6000の寺院のほとんどが破壊された）。

「チベット民族がどうなるか」

……インドのDharamsalaにDalai Lama14世の亡命政府→自分の国を建てるのではなく、昔の国に代る何か（国）を何処かに作るしかないのでは（イスラエルの様な）。

「チベットの問題が日本にとつてどういう意味を持つか、学習の要があろう」

……米国に依存する体制からの脱却、グランドデザインを描く要があろう。国民自身が建国する方向に向かわないと日本の存在は危うくなるのではないか（昨年来の尖閣を巡る暴動、越境等）。非常に教訓的な事象であり、チベットの轍を踏まないようにするは如何にあらねばならぬか。

〔講演後の質疑〕

江本..最初の米軍機の墜落事件は如何なる」とだつたのか。

倉知..アンサムから昆明への国民政府軍支援物資輸送機がチベットで墜落した。

（中村）英米ソの蒋介石支援（援蒋ルート）ルートが日本軍のビルマ占領で遮断されたため、（アンサム—昆明）の横断山脈越え（H

ump）空路を開発した。

輸送作戦中に墜落した機は多い（サルウェン川周辺に）、米アル・バインクラブ（AAC）のクリンチさんの父親もこの作戦に従事し、梅里雪山周辺で墜落死したとのこと。

米国がチベットに関わる契機に。江本..チベットが独立国として存続する意識が薄かつたと言うが。

倉知..ラサで政治的実権握っていたのは僧侶であり、自己の権益追求に汲々。他方、カム地方の領主は中共政府への対抗意識が強い。しかし、中共軍の侵攻が早く、体制が整う前に打ち破られた。

江本..カンバの英雄タシとは。倉知..本人の自伝の邦訳もある。

〔中村さんの補足説明とスライド〕  
恒例のチベットの東の踏査行は、昨年は全くチベットへの入境は叶わなかつたので9月末～10月に四川、雲南に赴いた。カンバ族の反抗は未だに続いている様だ、アムドも。ポカラのチベット人は嘗てのCIAが支援したムスタンゲリラの流れ。  
東チベットはオリンピックの2008年以来入域が難しくなり、年々シビアになつてゐる。昨年も四川でも焼身自殺が続いた。（谷口..2011/10ナムナニ峰（南面）～北面へ

縦走）に行つたが、去年からは全く外国人は入れなくなつた）。

四川には6000m級で200座以上の未踏峰があり、雲南には6000m未満峰が相当数ある。

雲南で私のメコン流域調査の足跡トレースを試みるも収穫ナシ。現状では昆明からラオス、ミャンマー、ベトナムに高速道路が通じている（嘗てはOld Tea Roadが通じていた）。シーサンパンナ（雲南のタイ族自治州）の北側ではブーアール（普洱）茶の栽培が盛んで、樹齢1000年とも言われる老木もある。

長年の探査行での座右の銘は「Anything Happens in China, Nothing is Impossible in China.」

江本..米国は本格的にチベットを何とかしようとしていたのか？

倉知..それはないと思う。

江本..中村さんの説明で、中国の発展のスピードに言及があつたが？  
中村..現状では中国の田舎でも、至る所でソーラー発電がある。

▼今号は中村正司さんの追悼号になります。中さんは私なども「M中さん」として逸話の多い先輩として存じ上げ、昨年まで新年会あるいは総会にご参加されておられたと思っていました。皆様からお寄せ頂いた追悼文でも昨年までお元気だったのに、この春になつての急逝のご様子で真に残念です。衷心よりご冥福をお祈りいたします。そして寂しくはなりましたが中樹会の皆様の益々のご活躍を期待いたします。

本号にお寄せ頂いた一般原稿は3編と少なめですが、中会員の探検家としての執念は勿論ですが、蛭川会員、藤原会員お二人が、どのように山に取り組んでおられるか心のこもった文章をお寄せいただき、読まれる方に大変参考になる寄稿となりました。有難うございました。蛭川さんは1991年針葉樹会報77号に載った故中島寛先輩の「熱帯の奇峰キナバル」のコピーを送つていただきました。山登りの楽しみ方の違いも見えてきます。ご興味のある方は会報77号をご一読ください。多数の会員からのご寄稿をお待ちします。  
（小島）

▼町主催のわさび塾に行つたのを機縁に、奥多摩一のわさび名人のもとでアルバイトすることになりました。川苔山や本仁田山の沢筋で8万本のわさびを栽培している千島国光さんという

80歳のおじいさんに弟子入りです。といつても実態は土木作業みたいなもので、どちらが先に動けなくなるか老老介護ならぬ「老老修業」の始まりです。それにしても60年も山で生活してきた大先輩がもらす言葉には学ぶところ大です。  
（井草）

▼6月初旬に中央アルプスの千畳敷カール左手の斜面でスキーの練習をしました。同行者が車を出してくれたのですが、山スキーはほぼ初心者で、斜面を登り続けるのは怖いということで、その人は中段まであきらめたため、一人で稜線まで上り、下りてきました。

最初は、バス会社の人によ「千畳敷でのスキーは5月末で終了、以降は山野草保護のためスキーニの立ち入りは禁止」と言われてあきらめ、空手で上まで往復したのですが、他のバックカントリースキーヤーから千畳敷カール外はOKということを知り、いつたん下りて正しい情報を提供を得られず無駄足を踏んだと交渉して、2往復目のバス・ロープウェー代をサービスしてもらいました。

そんな経緯もあり、短く小さな試みでしたが、またシーズン最後にしては滑り方もいまひとつでしたが、やり遂げた充実感がありました。

（川名）

## ■会費納入のお願い

平成25年度の会費納入をお願いいたします。なお、昨年の総会で納入額が変更になりましたので、ご注意ください。

会費（普通会費）は卒業年次に関係なく、一律5000円です（ただし、昭和29年度以前卒業の会員は従来通り会費免除となります）。

また、普通会費のほかに、期間を問わず贊助会費を募集しております。贊助会費は一口1000円で、口数は任意です。今年は90周年事業を計画しておりますので、その資金手当てのためにも、贊助会費へのご協力をお願い申し上げます。

### ▽会費納入先の銀行口座

銀 行：三菱東京UFJ銀行

口座名…針葉樹会

赤坂支店  
口座番号…普通 4825647

\*振込む際、摘要欄にお名前（卒年次）をご記入してください。

会計幹事 佐藤久尚